

続古事談配列考

—— 連話の法則 ——

生 井 真 理 子

どのような事情によるかはともかく、説話（あるいは古事）の蒐集に始まって、それらを取捨選択しながら、一つの「集」という形態に整えようとするとき、編者は各話の配置の仕方を決めなくてはならない。逆推理の形となるが（実際の手順ではなく、結果から見える手順といってもよい）、『続古事談』の場合、まず大枠として、第一王道后宮・第二臣節と、各巻の部立が定められ、その分類に依じた内容の話が配分される。その中から巻頭話を選ばれ、それに続く話の配列の順が定められることになろう。

本稿で取り上げるのは、その配列に関わる連繋の問題である。『続古事談』の場合、第一巻の巻頭話から跋文に至るまで数珠繋ぎ式に連繋している。その方法は共通類似の因子の重なり合いを利用した《しりとり方式》を中心に、時に連歌・連句の寄合・付合の連想様式、及び和歌・漢詩などに見られる言語遊戯をも応用した連鎖

であり、一種の擬似連話と言ってもよい。

なお、テキストは群書類従本を用い、一話をどこからどこまでと捉えるかは問題のあるところはあるにしても、便宜上群書類従本に従うことにする。煩瑣を避けるために説話番号は通し番号を用い、第a話は【a】と表示する。

一、孤立話

『続古事談』においては、話群の存在から説話の配列の仕組みを見ようとする方法がある。かつて、志村有弘氏は

本書の説話配列法は、同類説話を同一箇所に集中的に収集しようとした

と述べ、共通事項を○●関係説話などとまとめる形で提示した^①。その後、小林保治氏は第一巻の分析から、

共通する人物やできごとの状況、事柄の内容の類似を因子として話の組み合わせや話は、連繋が配慮されているとして、話群にまとめた。^②「同類を並べる」ことから、「組み合わせや連繋」への言及は、隣接話相互の連関を一步進めて見ようとする姿勢となる。だが、話群に区切ってしまうて捉えることは、時として連繋への道を閉ざす。諸話の話群化の中で、孤立して前後の説話と結びつかないものがあることを、両氏自身が指摘している。

志村氏は「『続古事談』研究序説」において、第五卷諸道の【一五四】から【一六八】の共通事項の分析の中で、整然と諸説話を分類していると見ながら、巻末の「蘇生譚」である【一六六】のみが共通項がなく、前説話と結びつかないとした。

筆師の説話と言うものの内容は明らかに仏教説話であり、諸道の部に入れるよりは、むしろ神社仏寺の項に加えるべき性質のものであろう

と述べる。^③しかし、第四神社仏寺の諸話は、特定の神社仏寺に関する話ばかりで、広く神祇説話・仏教説話を集めたものではない。それに対し、筆師能定の不動信仰は、特定の寺社に関わるものではなく、第四巻に組み込む場がない。彼は「御筆結い」とあるように、筆作りによって朝家に奉仕する官人であった。第五諸道の各話における中心人物はすべて、朝家のために諸道諸芸をもって奉仕する者

たちである。筆結いという技能そのものに及ぶ話でないために異質に見えるが、やはり第五巻しか適当といえる部立はない。

孤立の原因は、話群の分類方法にある。「共通類似」に対する定義の枠の問題と言ってもよい。言語表現には「まるで○○のごとく」という見立ての技法がある。見立ても連想による類似の一種である。【一六七】において、下野前司義家は白川院が八幡宮へ向かう御幸の前駆として「御輿チカクサブラヒ」て護衛をした。【一六八】の「ワカキ童子（不動自身あるいは不動の使者）」もまた、焰魔王宮までの道のりを「ウシロニソヒテハナレズ」、まるで義家のように能定を護衛する。他にも共通項がある。能定の蘇生は「嘉承元年ノ夏」、前話【一六七】と同様、「白川院位ノ御時」である。世の中の様相はと言えば、「世ノ中サハガシクシテ」「山三井寺ノ大衆オコリタリケルコロ」と、疫病の流行・僧兵の蜂起と世情不安であった。そして、焰魔王は冥界の王であり、仏教神として信仰の対象となった。八幡もまた神である。また、主従という紐帯によって義家は白川院を守護する義務があり、信仰という紐帯によって能定を守る義務がある。すなわち、白川院が在位の時代の世情不安の折、守護すべき人物が神の宮殿へ向かうのを護衛したという点で、義家と不動の行為は共通する。この共通点で両話は結ばれる。

次に、小林氏が「続古事談の方法―第一「王道后宮」の場合―」

で挙げた、前後の話と明白な連絡関係を見せない「孤立話」【二八】を見てみよう。小林氏は「視点をかえて」、【一六】→【二八】を宮廷の儀式と生活作法の事例群と捉え直すことで、孤立話の解消を図った^④。事例群という話題の流れは連想による連繋の一つだろう。だが、話群の変更や拡大では、前後の話との緊密な連絡はやはり見えてこない。

【二七】と【二八】の共通類似の因子は「為政者の遊びのためのお出かけ」にある。【二七】白川院が花見に「法勝寺ニオハシマシテ」、蹴鞠に興じたことから、【二八】嵯峨天皇が「嵯峨ノ別業ナドニ常ニオハシマシ」て、朝政もせずに遊んでいたことに連想が及ぶのである。

同時に、【二三】→【二八】には、文中に登載された和歌を巧みに利用してのおもしろい連繋が展開されている。【二三】鳥羽院の宇治御幸の折り、「時ノ花」家成が富家殿のはからいで、経蔵に特別に同行を許された先例から、後白河院の宇治御幸の際、院の寵愛を受けている自分も「メシアラムズラム」と心待ちにしていた信頼だが、「召事ナクテヤミニケレバ、人シレズムツケハラダチケル」という次第で、〈思う事（一つ）が叶わなかった〉。【二四】後中書王が賀茂で詠んだ「思フ事モロヤナガラニカハヒナバ御手洗川ノシルシト思ハン」は、〈思う事（二つ）が両方叶ってほしい〉と願う

歌。【二五】威子の立后で三后冊立を果たした道長の歌は、「此世ヲバ我ヨトゾ思モチ月ノカケタル事モナシト思ヘバ」で、〈思う事（三つ）がすべて叶った〉喜びを詠んだ。というわけで、こうあって欲しいと思う、願い事に関する状況が、順次変化する仕組みである。【二三】の失望から【二五】の満足への間に、【二四】の神への祈りが入り、そのおかげで願いが叶ったかのごとく、【二五】の歌へ連なるのも計算の上であろう。同時に、各人の願望の数は一・二・三と増加してゆき、【二三】で信頼から不満のはげ口とされた範家は三位、【二四】の後中書王は二品、【二五】の道長は従一位と、位階の数字は減少してゆくという数字遊びも存在する。

【二五】の歌の「モチ月」は、【二六】の定頼の歌「日影サス雲ノ上人コザリセバ豊ノ明リライカデシラマシ」の「雲ノ上」「明リ」と縁語関係にあり、二首の歌は望月の明るさに対して、太陽の明るさを詠んだ点で一対になる。この定頼の歌の〈来なかったなら〉という条件に合わせて、【二七】では、「山桜タヅヌト聞トサソハレヌ老ノ心ノアクガル、カナ」御返「山深ク尋ニハコデ桜花ニカ心ヲアクガラスラム」という二首の歌が続く。花見のための白川院行幸の御供に加わらず、法勝寺に〈来なかった〉殿と、白川院との贈答歌である。〈来なかった〉というのはその場に〈いなかった〉という事である。そこで、嵯峨天皇が「ミヅカラアサマツリゴトニア

ハセ給ハザリケルナリ」の理由が、嵯峨の別業へ常に出かけていて、朝政の場に出て来ないためにへいなかったからだ、という【二八】につながる。

この種の言語遊戯は他にも例がある。たとえば、第五巻諸道の【一六四】【一六五】【一六六】。【一六四】強盜保輔は捕らえられるに及んで、「カタナヲヌキテ腹ヲサシキリテ」腸を掴み出し、自殺を図った。【一六五】檢非違使の判官を装った盗人は、奈良の僧綱たる房主に取りつき、「カタナヲヌキテサシアテ、」脅し、要求条件を呑ませた。【一六六】法住寺で文行と正輔は諍いを起こし、怒った文行が「タチヲヌカントシケルヲ」、そばにいた重通の父が大力で押さえて抜かせなかった。事情と結果は大きく異なるものの、「刀を抜く」という行為に関わる様々なバリエーションが続く。しかも「カタナヲヌキテ腹ヲサシキリテ」「カタナヲヌキテサシアテ、」「タチヲヌカントシケルヲ」と抜き出すと、まるで時間的に遡上しているような錯覚を持たせるような変化がある。

【二八】に戻ろう。【二七】と【二八】が連繋していることは、このように明らかであるが、【二八】と【二九】はどうか。【二八】の「放逸」な嵯峨天皇は、本来天皇のなすべき仕事であるにもかかわらず、「ミツカラアサマツリゴトニアハセ給」わなかった。【二九】の寛平法皇も殺生禁断の令を出した翌年、「ミツカラタカガリヲシ

給」う。両天皇は天皇自らなすべきではないことを行った点で同類である。また、【二八】に引用される「徹旦取衣領會者少」という本文は、【二九】の善宰相が管丞相に忠告するに当たって引いた、「雖離朱之眼不見睫上塵、雖仲尼之才不知箱中物」の句と同様、「見ることができない」ことを表現したもの。これもまた、先述した和歌の例と同様、引用の漢文を利用した言語遊戯で寄せ合っているのである。

二、擬似連話

以上のような分析から明らかのように、『続古事談』は、分類した話群を羅列するのではなく、隣接話相互に共通類の因子を持つことで連接しながら、部立に応じた話題の流れを持つ仕組みになっている。話群そのものが、何らかの基準を用いた共通類の因子をまとまって共有するものを指すのであるから、話題を転じて、話群と話群の隣接部分に当たると別な共通類の因子が存在すれば、連繋の面では途切れていないことになる。

これを単純化して説明してみよう。たとえば、A・B・C・Dという順に並べられている四話があるとする。AとBにはx、BとCにはy、CとDにはzという共通類の因子があれば、AからDまで連繋していると考えるのである。A・B・Cの三話にはさらにp

という共通類の因子があつて、DにはPに相当する部分がなければ、A・B・CをPでまとまつた話群と捉えた時に、Dは孤立話になつてしまふ。しかし、B・C・Dの三話にqという共通類の因子があるとすれば、話群の基準をqに設定した時には、Aはまた孤立して見えるであろう。pが部立に応じた内容であり、qが話の主題・部立に直結しない内容や言語遊戯であつた場合、我々はqを見落としがちである。前項で取り上げた【二八】【一六六】は、このような事情で孤立してしまつたのである。

『続古事談』編者が生きた時代は、百韻連句や鎖連歌のように長く連ねるのが流行定着していつた時期に重なり合う。連歌・連句の特色として、伊地知鉄男氏は

連歌・連句の各句には、はじめから独立し完結することが要請されるが、その独立や完結は最後まで他を反発したり排除しあうものではなく、その前後の句相互の間にはなんらかの意味でたがいに触発し、融合し、映発しあう因子（それを寄合・付合という）を内包するものである

と説いた^⑥。その因子による様々な連想作用から、全体を規制する文字数、韻字、賦物などの条件をも満たしつつ、直列的に連鎖・展開する仕組みになつており、そこに何らかの基準でまとめられる同類の句群を見出したとしても、各句の順序を替へることは不可能であ

る。

説話集に限らず、歌集や詩集・抄物にしろ、配列が必要なものの場合、部立による配分の中でも、配置の順は各々に工夫されているはずだが、それは連歌や連句のように（付けていく）質のものではない。それでももし、故事を集め、配列するときに、「集」の体裁と構想を保持しつつ、連繫の方法に連歌や連句の寄合・付合と呼ばれる連想様式、あるいは和歌・漢詩の技法に見られる言語遊戯の連想を応用して用いれば、各話の配列は直列の連繫の相を帯びてくる。もともと、蒐集された話は各自「独立し完結」しているものである。前話の中にある因子（単数とは限らない）から連想される、広い意味での共通類似のものを内包する話を選び出し、またそこに別の因子を見つけて、次話へつながるようにと同じ作業を繰り返す。共通類似の因子は、小林氏が挙げた「共通する人物やできごとの状況、事柄の内容」の類似の他、連歌・連句と同様、語句そのものや余韻として残る情趣にも及ぶ。無論、それは『続古事談』全巻を通じて、特に近接する話の中で普遍的な存在であつてはならない。こうして、句ではなく話を（付けた）ように見せながら、予定している方向へと話題の流れを作りつつ、収束させていく。『続古事談』の連繫方法は、基本的にこのような構造になつているのである。

全巻を通じてこのような連繫の糸が断たれている所はないが、紙

数の都合上、第一話から跋文に至るまでの分析を行うことはできない。したがって、連繋によってもたらされる重層的な作品世界の読解分析は別の機会に譲り、ここでは、第一巻の初めの部分の分析を、今まで見過ごされてきた言語遊戯の面に焦点を当てて行い、その他の部分に見られる同様の技法例を注記に示してゆく方法を取りたい。

まず、『続古事談』冒頭の損亡説話群と呼ばれる六話を見てみよう。【一】は、一条院と延喜帝が極寒の夜、人民の寒さを思つて衣を脱いだ話。その最後の文章「御衣ヲヌギテ夜御殿ヨリナゲイダシ給ケルトイヒツタヘタリ」の、「御衣ヲヌギテ」から連想が始まる。

「衣」の縁語に「解く」があり、【二】の狂気の冷泉院がまず「シルシノカラゲヲ解テアケム」としたことへと話は繋げられる。次に「衣ヲヌギテ」は「衣ヲヌキテ」と書いた。「ヌキ」の同音に「抜き」がある。冷泉院はこの後「寶劔ヲモヌカム」としたが、宝劔の靈威に「ヲチテヌキ給ハザリケリ」と、掛詞式に連想が院の行為に向かう。延喜帝は衣を解いて脱いだが、冷泉院は解いたものの抜くことができなかったのである。

【二】の最後に宝劔は「目ノ前ニウセニキ」と平家滅亡の折、海に沈んだことをほのめかすが、この「寶劔」から【三】の冒頭部「東宮ノ御マモリニツボキリト云太刀」が想起される。また、【二】の冷泉院によつて解かれた「シルシノ筥ノカラゲ」を紀氏の内侍が

「モトノゴトク」から直した行為は、【三】の最後の部分に記される、「ツボキリノ太刀」が焼けて「身バカリ」になったのを、柄と鞘を新しく作り、元の如くに直した行為に通ずる。【三】の「ツボキリ」という太刀の名から、同音の「壺」が連想される。鞘に刀身を納めるのを、器に物を入れると見立てたのであろう、【四】では、小さなものから大きなものに転じて、酒を入れる三十石入りの大刀自という壺がまず話題となる。大刀自も、地中から抜け出て「身バカリ」となって横たわった。【四】の最後に大刀自・小刀自・次刀自と壺の名が並べられるのに合わせるように、【五】には「油漏器」に始まって、「火ヲケ」「タダラ」「御テウシ」と、同じ容器の器物尽くしが展開される。

【五】の最後の文章「雅忠典薬頭ノ時アタラシキ銀ヲ（中略）ソナヘケリ」の「典薬頭」から、「典薬寮明堂圖」が記憶の中から呼び出されるかのように、【六】へと続く。【六】は、「カヤウノ累代ノ寶物、今ハ一モノコル物ナシ」で終わる。この「寶物」から、【七】の「カノ大明神居給タリケルキヌ」と「ツクリタル龍」が連想される。坊門尼が上賀茂に祈請した折、靈夢に大明神が「キヌノソデ」の上に現れ、男子出生を告げて、「ツクリタル龍」を与えたのであるから、その後、鳥羽院に奉られた「ツクリタル龍」も御正体として別宮に祀られた「キヌ」も「寶物」である。新しい宝物の

出現である。

【一】と【二】の「ヌク」や、【二】と【三】の「ツボ」などのように、同音あるいは同字を連繋に利用した類似に第一巻巻末の【三五】【三六】の例がある。【三五】【三六】は聖子・任子の名字定めに関する話だが、【三五】では「王」の字が話題になる。「ハラムト云ヨミ」のある「恥」と、「ムナシト云ヨミ」がある「壬」で成る「聖」の字を付けた「聖子」という名は、「ムナシキ子ヲハラミタラム」で憚りがあると難ぜられたとおり、聖子は「水ヲオホラカニ」産んだという。「ハタシテムナシキ子ナリ」というわけだが、この「壬」の字、次の【三六】の「任子ト云御名」にも存在する。「恥十壬」↓「イ十壬」の連想で、漢詩の離合の応用である。

【二】【三】【四】に用いられた同類の行為と見立てる技法は、第一巻の【三三】【三四】をもつなく。【三三】興福寺南円堂の「成功」を請うた関白大二条殿は、後三条帝の拒絶に対し、藤原氏の上達部全員を引き連れて出て行ってしまった。【三四】「大和國ソフノ上ノ郡」の「小山」が大移動し、「オヒタルウヘ木モハタラカズシテウツシオキタリケリ」という地変が起こった。藤原氏の長者たる関白大二条殿を「小山」に、小山の上に生えている木々を、関白大二条殿の「ミナマカリタテ」の命令に従った藤原氏の上達部に見立てると、両話の〈そっくりそのままの大移動〉の状況がよく

似ているということになる。ついでに指摘すると、興福寺南円堂は大和国添上郡にある。

【四】【五】に用いられた「もの尽くし」は、連繋にも応用される。まず、【一】【二】【三】の書き出しには、「帝王」「神璽寶劔」「東宮」と、朝家の象徴的存在が連ねられ、【四】【五】【六】の書き出しには、「造酒司」「主殿寮」「典藥寮」と役所の名が並ぶ。これらは分かりやすいが、少々機知を要する例を示そう。第五巻の中間部には管弦の名手たちの話が続く。【一四九】【一五〇】【一五一】で話題になったのは玄象という琵琶、陵王という舞の伴奏の笛、試楽の大鼓の演奏に関して。この「琵琶」「陵王」「太鼓」には共通するものがある。すなわち、「陵王」の舞人は右手に桴を持って登場し、「琵琶」や「太鼓」も撥を持つ（「バチ尽し」）。

また、第六巻、【一七九】の漢の文帝は上書の袋を縫い集めて「帳タレテ」儉約し、【一八〇】の丞相丙吉は異常な暑さのためか「牛ノアヘク」のに出会って顔色を変え、【一八一】の陳平は国王への返答に窮して、「ソノアセ衣ヲトリニケリ」という有様であった。ここで何が共通しているかといえ、文帝が「帳に垂らす」、牛が暑くて「舌を垂らす」、陳平が「汗を垂らす」となっている。全て〈垂らすもの〉。まるでなぜなぞのようである。

同一人物が連続して登場することも、物尽くしの特殊型と言える。

そこに見られる特徴として、第一巻の【一】から【二】【三】に登場する為隆、第四巻の【九五】【九六】【九七】の八幡など、同一の人物や神仏が連続して登場するのは必ず三話までで、四話以上の例はない¹⁰⁾。連句や連歌同様、同種の連想が続き過ぎるのを嫌ったものであろう。人物に関する遊びでは、第二巻の【六六】【六八】に土御門右大臣師房が登場し、それと交互に、師房の子俊房と顕房がどちらも「大臣ニイタルベシ」の予告からんで【六七】【六九】に登場する。他の共通類似の因子との兼ね合いもあるが、ちよつとした（大臣父子）の賦物風になっている。

賦物風の言語遊戯は第一巻の【一】から【六】にも見られる。

【一】 イヒツタヘタリ。

【二】 ウセニキ。

【三】 ヤケテ身バカリノコリタリケルニ、ツカサヤヲ作りテグセラレタル也。

【四】 ミナウチワリテケリ。

【五】 アタラシキ銀ヲフルキニマゼテウチカヘテ供御ニソナヘケリ。

【六】 今ハ一モノコルモノナシ。

各話の末尾である。奇数番号の話は当代まで損じつつも伝わっていることを言い、偶数番号の話はすでに失われたことを言う。例え

て言うなら、奇数番号話が連歌の長句、偶数番号話が短句の役割を持ち、賦題は「伝失」となるうか。後鳥羽院時代の長連歌の賦題として、よく例に挙げられる「黒白」のような対称題を思わせる。¹¹⁾

『続古事談』に用意された古事は、出典研究の成果が示すように抄録というべき性質を帯びているから、内容によって文章の長短は避け難い。したがって、連歌・連句のように定型に支えられる押韻や対句などは望みえない。例えて言うなら、何人かの人間が順番に知っている古事を語っていくことになり、その時の条件として、連歌・連句の発想を応用しながら、必ず前者が提示した古事の内容や語句などを受け止めて、連想式にながしかの関連や共通性のあるもの、対になるもの、機知に富んだ言語遊戯となるものなどを含み込んだ内容の古事を披露しなければならない、というような場を想定してみると、隣接話相互の連繋プレーが見えてこよう。こうして順次話を付けていく中に読者はおもしろさを発見するのである。

隣接話相互の共通類似の因子として、対句になるものは『続古事談』各所に散見するが、¹²⁾【一五】【一六】の金と銀もまた一対として言語遊戯がある。【一五】の最後で後一条帝を謀り、砂「金」を懐に入れて出て行った傳大納言道綱が、続いて【一六】の地火爐の行事では、「銀」で土鍋を作り芋粥を中に入れた、と始めるところが一興であった。

この傳大納言道綱から次の【一七】の話題の人物「無才ノ者」国資が連想されるのは、道綱が「小右記」に「一文不通人」と書かれるごとく^⑭、才無き人物であったからで、連句・連歌に古事や本文などによる連想で繋ぐ寄合の技法と同種である^⑮。

また、院政期の連句には当意即妙の機知と諧謔に富んだものが多いが、【六】から【七】への「寶物」の連想は、言い換えれば同じものということで一種の機知付けといつてよい。『続古事談』の中でもことさらに奇抜な発想で連ねて見せた例に第二卷【七〇】【七一】、第五卷【一三八】【一三九】などが挙げられよう。【七〇】堀川の大臣は、道で出会った宰相が「小野宮ノ説ナリトテ、車ヲカケハズサ」なかつたので、「九條ノ説トテ」前の簾を下ろさないと、う対抗措置を取つた。つまり、彼の車は「簾なし」の状態で、前簾を下ろしている宰相に相対する大臣の、「一体どちらが身分が上なのかね」という揶揄の表情が丸見えである。これに閉口した宰相は「其後ハカケハズシケリトゾ」という。次の【七一】は左大弁経頼が藏人頭になってあまりに喜ぶので、見かねた教恵座主が「カクヨロコバル、コン無廉ノ事トオボユレ」と諷めたが、経頼の見事な切り返しに「トカク申スニヲヨバズ」と、前話の宰相同様折れた話である。ここでの言葉遊びは「ブレン」。「簾なし」は「無廉ニブレン」となつて、教恵の言つた「無廉ノ事」と同音で響き合う^⑯。

また、【一三八】後半で、川人の勘文には「平地九丈ノ大水イツベシ」とあつたけれども、その年「ソノ水イデズ」、よつて川人の他の予言も信じ難い、と答えた白川院の言葉に対して、編者は【一三九】で、まず「青海波」という舞の話を始める。海は「大水」だが、舞だから「ソノ水イデズ」と洒落たのである。

三、卷から卷へ

かくして、多様な技巧を駆使しつつ、各話は連ねられた。これで、『続古事談』の各巻の部立に相応する内容の話題を持つ大話群が、巻毎に巻頭話から巻末話まで直列的に連なつていくことになる。

次に各巻の巻頭話に出てくる季節を見てみよう。第一卷「極寒ノ夜↓冬」、第二卷「子日↓春」、第四卷「一夏九旬↓夏」、第五「仲秋十二日↓秋」。第五巻だけは巻頭の【一二一】に季節は明示されず、二番目の【一二二】の季節を取つた。第三巻は欠巻だが、このような見方が許されるなら、冬から始まつて四季が順に置かれたことになる。第六巻は季節なしで、これを「春夏秋冬・その他」の和歌でポピュラーな部立に当てはめれば、【一六九】の内容からして「雉」に当たろう。

「四季雑」の五部立は、『続古事談』成立時に近い頃の百首和歌・五十首和歌などにもよく用いられている。この場合、あるいは「春

夏秋冬恋雑」や「春夏秋冬祝恋雑」などのような部立でも、「雑」で終わるときは、最後は松や鶴などを詠み込んだ祝言性をもつおめでたい歌で結ばれる傾向にある。漢詩においても、『資実長兼両卿百番詩合』は「四季雑」の五部立を踏襲して、やはり最後は「松竹」に関する題で締めくくった。『続古事談』はと言えば、全巻の結びに当たる【一八五】は、陸法化が「過去ノ七仏ノ時」からいたという超長寿の亀を掘り出したという、まさに祝言性を帯びたおめでたい話であった。

『続古事談』が「四季雑」の五部立を巻頭にのみ配して、祝言で終える形式を取ったことはほぼ疑いない。ただ、冬から始まる点が変わりである。これについては、『王沢不渴抄』に示唆的な一文がある。連句についての流例として、発句は「春會言春景、夏會言夏景、若又、言當座事」と記す。つまり、発句は当季の景か、その当座の事がらを詠ずるのが常であったという。しかも、「百韻ノ内デ終ノ二句ハ祝言ヲスル也。連句ノ定事也」とする。これより約六十年ほど前の『続古事談』成立時の連歌や連句の全貌を現すものは残っていないが、その当ても『王沢不渴抄』の言うような形式を取っていたかどうかは明らかでない。しかし、歌会や詩会でも当季を重んじた事から考えれば、連歌や連句の場で当季から始めるのはごく自然の事に思われる。とすれば、連歌や連句を意識する配列の方法を取っ

た『続古事談』が〈冬〉から始めて祝言で終えるというのは、かならずしも変則ではなかったかもしれない。『続古事談』の跋文によれば、完成は建保七年四月二十三日。すでに述べてきたような緻密な連関を考慮しつつ、話を配してゆくには短期間では難しく、前年の冬くらいから構想に取りかかってもおかしくないからである。(もつとも、これは単なる推測に過ぎないが。)

以上の点から、各巻頭話を「四季雑」の五部立の形式で統制する事により、個々の巻も一つの連続を見る事となった。その上、話群と話群が隣接している場合でも別の共通類似の因子を以て連なっていたように、巻末話と次巻の巻頭話もまた、すでに指摘したような手法で同様に連続されている。第一巻から第二巻へは、【三六】の「大才ノ人モヲノヅカラミヲヨバヌ事アリ。チカラヲヨバザル事ナリ」と結ぶ時の、残念だがどうしようもないという想念の余韻が、【三七】の、子日の宴に四条中納言・祭主輔親が参加しなかった事を「殿ヨリ始テクチヲシキ事ニ人々」が思つた心情と融け合う。第四巻から第五巻へは、【二〇〇】「嚴間寺正法寺の「嚴」と地主神清滝権現の「瀧」から、【二二二】の「瀧ノ石」が想起され、【二二〇】に二度語られる投身は、【二二二】の瀧の水が滝壺に落ちる様と映像的に重なり合う。第五巻から第六巻へは、【一六八】の焰王に対する童子の能定蘇生に関する交渉と、【一六九】の斉の威王に

対する賢人淳于髡の諫言から、「王」が相手の言葉に対して一度は拒否するものの、結局その主張の正しさに折れる点で共通する。

問題は第三巻の欠落である。他巻の例から言えば第二巻巻末話と第三巻巻頭話、第三巻巻末話と第四巻巻頭話に共通類似の因子があるはずである。したがって、第二巻巻末話から第四巻巻頭話へは原則的に連想は続かないことになる。だが、第二巻から第四巻への連想による移行は、意外にも可能である。第二巻巻末話【九四】の「頭弁行成（中略）ネブラレケル夢ニ」と、第四巻巻頭話【九五】の「御門ノ御夢ニ」とは対になり、どちらの夢もこれから起こることの予告であった。また、【九三】は堀川左大臣の往生とその奇瑞、【九四】は往生を志し互いに善知識となり合う成信と重家の発心出家、【九五】では行教の祈りに八幡の本地たる阿弥陀三尊の出現が語られる。つまり、往生の奇瑞↓発心出家・善知識↓阿弥陀三尊と〈極楽往生〉に関する連想が続いていることになる。勿論、共通類似の因子は話題に限定されてはいないので、偶然にも第二巻末と第四巻頭に連繋の要素が存在することはありうる。ともあれ、編者の作り出した連繋の法則の面に限って言えば、第三巻はなくとも支障はなく、全巻を通じて個々の話は数珠つなぎ式に連繋されていることになる。

第三巻の欠落の事情は不明ながら、第三巻を除く『続古事談』の

説話配列は、第一話を発句の代わりとして、揚句に当たる最終話に至るまで、隣接している個々の話を共通類似の因子をもって結びつつ、連想の移行によって直列的に連鎖を進行させ、また、部立の変わり目になる巻頭話には「四季雑」の形式を配する事で、巻そのものを統合連続させる構成になっていると言えよう。

さて、陸法化が「過去ノ七仏ノ時ヨリ爰ニアリ」と言う（古い）亀を掘り出したように、自分も又、箱の底に朽ち残っていた「古キ人ノサマザマノ物語」を塵の中より見つけ出し、まとめ直したとして、跋文は長い古事連話の終わりを告げる。否、そのように述べる事で、読者は思わず、「イヒツタヘタリ」と語った第一話から読み進めてきたすべての話をもう一度振り返ろうとすることになる。そこにまた連鎖が起こり、『続古事談』の世界はまさに数珠のように連環するのである。

『続古事談』は、連繋に連歌・連句の方法を応用し、殊に言語遊戯を行う事で内容的に二重構造となり、それが文中の語句に交錯し重なり合う仕組みとなつて、各話一つ一つの世界とは別の享受のありようをも可能にした。連歌や連句のような創作ではないだけに、博識で多くの典拠資料を操作したにしても、どれほどの労力と知力と卓抜な構想力を必要とするかは想像に難くない。『続古事談』の

場合、既述したような機智に富んだ言語遊戯が特色の一つである。が、それだけではない。『続古事談』の配列にはまだまだ話の表面には現れない連繫要素が隠されており、それらが単なる抄録の世界から、編者の生きた現在と連なりつつ、一個の文芸作品として転化させてゆく原動力となっている。この点については次稿で述べる事にしたい。

注

- ① 『続古事談』研究序説（『中世説話文学研究序説』所収 桜楓社 一九七四）
- ② 「続古事談の方法―第一「王道后宮」の場合―」（『説話集の方法』所収 笠間叢書二五〇 笠間書院 一九九二）
- ③ 注1前掲論文
- ④ 注2前掲論文
- ⑤ その他の例として、第四巻の【一〇四】【一〇五】【一〇六】においては、各々天神・金峯山・二荒山の（神のおわす聖地）について語り、聖地への他者の侵入が「汝ハキルトモ子孫ハスムベカラス」↓「九月九日ヨリ後三月三日マデ人マイラス」↓「頂の湖水には 木葉一水ニウカマズ、魚モナシ」と、だんだん許容の条件が厳しくなっていく。また、同巻巻末の【一一八】【一九】【二〇】。【一一八】仁康上人は「丈六ノ釈迦仏」を安置するために、祇陀林寺の堂を建て、【一九】聖徳太子は本尊とする如意輪観音像のために「六角ノ小堂」を作り、【二〇】泰澄法師は「等身ノ千手観音」を作って、本尊「探半ノ金銅ノ千手観音」をその中に籠めた。【一一八】↓【一九】↓【二〇】と、各本

尊仏の大きさとともに、仏像を入れるもの（建て物・像）の容積が順次小さくなっていくように配列されている。

⑥ 日本歴史叢書15 『連歌の世界』（吉川弘文館 S 42）

⑦ 群書類従本では「ツクリタル籠」となっているが、『日記』康治元年五月十六日の条、及び伴信友本・三手文庫本・岩崎文庫本・神宮文庫本などの諸本も「籠」となっていることから改めた。

⑧ その他の例を挙げる。第二巻の【八四】の清輔が着ていた「アヤクズカミシモ」（話中では連歌の材となった）の「上下」を「守下」にすり替えて、【八五】の甲斐権守が馬の下敷きになった話につなげている。また、第五巻の【二二五】は采女正俊通という医師が「七十余ニテヌノ、ナラシニムラサキノサシヌキヲキテ人ニ会ケリ」という短い話。

【二二六】は「モガサト云病ハ新羅國ヨリオゴリタリ。筑紫ノ人ウワカヒケル船、ハナレテ彼國ニツキテ」と始まる。【二二五】と【二二六】の共通類似の因子は傍線部の「むらさき」。「筑紫」の中に「ムラサキ」がある。和歌の隠し題の漢字版というところであろうか。

⑨ その他の例として、第二巻の【九〇】の「内ノ女房車アマタ色タノキヌ」出シコボシテ、【九一】の「クズノハカミアアバミタル衣ヲキテアリケレバ」、【九二】の「初受下地五濁浪漸重上界三鉢衣」と、（衣尽くし）。第五巻の【二二三】【二二四】【二二五】には、先行する【二二三】の歌の序代にある「暮齡」を契機として、「七八歳バカリナル小童」「七八計ナル女」「七十餘ニテヌノナラシニ」と、七・八・十の組み合わせの（年齢尺）がある。

⑩ 第四巻には薬師仏が六話連続する。ただし「一〇〇寺の薬師仏像」が話題になっており、その点から言えば例外には当たらない。

⑪ その他の例として、第二巻の【三七】から【四一】までの各冒頭部の語句に「子日（＝子の方角は北）」「南面」「真信公（＝藤原氏北家一

門)、「南面」、「キタノ宮(北の宮)」があり、(南北)の賦物風になっている。また、同卷【六一】【六二】【六三】【六四】では、「忌日(=喪なので黒)」「石灰(=白)」「スミ殿(=墨と同音で黒)」「耻ラ雪ノミニアラズ(=雪は白)」と、(黒白)の賦物風。

⑫ 従来の研究成果を踏まえながら、各話の典拠に目配りしたものに、『研究叢書一五〇 続古事談注解(神戸説話研究会編 和泉書院 一九九四)』がある。

⑬ 第一卷の【一八】【一九】の「参木ニナサレケリ」「律師ニナサレケリ」は完全な対句になっている。この場合、内容的にも賞として与えられたという点で共通しており、それを意図して並べたと思われる。また、語句のみを意識した例として、第五卷の【二二八】の「内モ、外モ、」に對し、【二二九】は「六條左大臣小野宮右大臣」と並べて、「内外」「左右」の対称同士になっている。

⑭ 【小右記】寛仁三年六月十五日条、「或云、道綱卿令申入道殿云、一家兄也、此度若任丞相、何恥勝之、只二个月可借給、縦雖無恙不可従事、何況有病乎者、余所思者、第一大納言年老太多、所陳可然、但一文不通之人、未任丞相之故、世以不許、以之可驗(以下略)。(傍線筆者)」

⑮ その他の例として、第五卷【一〇七】の白山の「證華ノ人」「化人」「神仙」と呼ばれた三人の上人から、【一〇九】の「長谷寺ノ觀音ノ化現ナルベシ」への連想は、間の【一〇八】の「上宮太子」が介在している。聖徳太子が片岡の「化人」たる飢人に衣を与えた話は有名だが、この話を「上宮太子」の一語から想起すれば、三話は化人伝承によって連なっていくことになる。また、第六卷【一八一】の「周勃」の「周」と「治粟内史」の「粟」から、【一八二】の「伯夷叔齊ガ首陽ノ嶽ラクハズシテ」への連想は、『史記』の「伯夷列伝」に見える「義不食周粟、隠於首陽山、采蕨而食之」の一文に列なる伝承を本文にしていると思われる。

⑯ その他の例として、第二卷の【四五】【四六】【四五】の後半、在衡が「左大臣二成時、右大臣ハアトアリ、左大臣ノ事思カケズト云ケル」に續けて、編者は「アヤシキ事也」とする。その理由は次の【四六】の文中にある。在衡が六位の時に鞍馬寺參籠の折、夢の中で「右大臣」と書かれた笏を与えられている。示現に「右大臣」とあるからには「思カケズ」も当然と云うわけである。また、第五卷の【一四五】の「身高」は舞人の名であるが、これを字面から「身(の丈)が高い」と解して、【一四六】の「だんだんと身の丈が高くなってゆく」「アラ、ギマヒ」が語られる。

⑰ 群書類従本・伴信友本・三手文庫本は傍書に、異本に「益」とあることを記し、神宮文庫本・東京教育大図書館本は「益カ」と傍書する。これは、このなぞなぞのような連繫法に気づかなかつたために、「無廉」より「無益」の方がふさわしいと見た者がいたということだろう。しかし、ここは経頼の喜び方があまりにも出世欲丸出しでみつともないから諫めたのであって、喜んで「無益」だというのはない。意味のうえでも言葉遊びの連繫にとつても「無益」では無益なのである。

⑱ 堀川院御時百首和歌(康治年中)「春夏秋冬雑」・「雑」の部の最後が「祝詞」十六首。院初度百首(百首愚草)「四季恋驛旅山家鳥祝」・最後の祝言五首。院第三度百首(百首愚草)「春夏秋冬祝恋雑」・「雑」の結びの歌「君にかくあひぬるみこそうれしけれなやはちせむ世、のすゑまで。院無題五十首(百首愚草)「春夏秋冬雑」・結びの歌「わかかのうらのあしへのたつのさしなからちとせをかけてあそふころかな。内裏名所百首(建保三年)「春夏秋冬恋雑」・結びの歌「大とものみつのはま邊の松かえに年経てするめあしたつ」の聲。道助法親王家五十首和歌(建保六年)「春夏秋冬恋雑」・「雑」の最後が「寄松祝」二十二首

等々の例が挙げられる。

- ⑭ 京大付属図書館平松文庫本（寛文七年版）による。解釈は能勢朝次氏の「聯句と連歌」（『能勢朝次著作集第七巻 連歌研究』所収 思文閣出版 一九八二）参照。

⑮ 異本では岩崎文庫本・伴信友本・三手文庫本が五巻立てで、三手文庫本は第三巻の横に「イニ四」として第三巻欠巻の異本があることを記す。神宮文庫本は第三巻を欠巻とする。東京教育大学図書館本は第二巻と第三巻を「臣節」として、「三七」から【六八】を第一巻に、【六九】から【九四】までを第三巻に振り分ける。巻頭話と巻末話は類従本・東洋文庫本・伴信友本・三手文庫本・神宮文庫本ともに異動はない。

第三巻欠巻の事情として

① 第三巻はあったが、散失した。

② 第三巻は部立としては存在したが、編者は第三巻を書かなかった。
a、何らかの理由で当初から書く意図はなかった。

b、書くつもりではあったが、何らかの事情で書けないまま終わった。
③ 第三巻はそもそも存在しなかったが、書写の段階でミスにより第三巻が第四巻と間違われて六巻立てになってしまった。

④ 書写の段階で、「古事談」とセットとして捉え、同じ六巻立てと見て、「僧行」「勇士」のいずれかが本来あったものと判断して、欠巻としての第三巻を表示のうえで加えた人物がいた。

等が考えられる。「統古事談」が「古事談」の部立てに倣ったとしても、すでに「漢朝」という例外の存在があり、第五巻にしても「古事談」の「亭宅・諸道」の「亭宅」がないことが示すように、「古事談」の部立てに合わせて第三巻の存在の必然性を説くことは、論拠としては弱い。配列の面だけから第三巻の存在を否定することはできないが、第三巻に関する問題は、存在の必然性から論証されなければならないだろう。

本稿引用の『王沢不渴鈔』は、京都大学付属図書館（平松文庫）のご好意により、閲覧させて頂きました。ここに感謝の意を表します。